

# 大仏殿方広寺拝観の栞

## 方広寺の沿革

天正十四年一五六といえは、豊太閤豊臣秀吉公の全盛期で、豪華な芸術を誇った桃山時代文化が最高度に達した時ですが、この年に秀吉公が創立されました方広寺大仏殿や、本尊の木造盧舎那仏坐像が、いかに善美を尽くした荘嚴華麗なものでありましたが、全く想像以上というより他はありません。

漆を塗り金箔を置いて彩色された十九米（六三尺）の大仏を安置する大仏殿は、前面約八二米（四五間）側面約五七米（二七間五尺）高さ約四五米（二五間）もありましたが、慶長元年一五九六の大地震に破壊し、七年一六〇三冬に炎上したのでした。その後、慶長十五年一六二〇に徳川氏は豊臣秀頼公と淀君とに勸めて、豊太閤の遺志を果すために大仏殿を再興させ、十七年の春、十九米の金銅大仏を本尊とする大仏殿の完成をみたのです。

豊太閤以来、大仏殿は今の豊国神社の位置に在り、その前に仁王門が建ち、廻廊をめぐらし、鐘楼は博物館のところに建てられ、西大門（現在の東寺南大門）は今の博物館の西南に七条通りに西面していました。南大門は今なお三十三間堂前の法住寺の南に荘大な姿を留め、太閤塀と共に往時を偲ばせ、諸大名奉獻の巨大な石垣は、旧大仏殿の位置に豊太閤の氣宇をまざまざと見せつけています。しかし、秀頼公再興の大仏殿は寛文二年一六六二の地震で倒壊し、金銅大仏は徳川氏によって貨幣に改鑄され、寛永通宝として特に寛文の文の字が刻されました。同四年には木造釈迦像をまつる大仏殿が建てられたのですが、これ又寛政十年一七九七月の雷火によって烏有に帰し、天保十四年一八四三ようやく尾張を中心に、伊勢、美濃、越前の人々の寄進によって、木造半身の大仏像がまつられたのであります。

**国家安康の鐘** 慶長十九年一六四四に鑄造された大鐘は、高さ四・二米（一四尺）口径二・八米（九・二尺）厚さ〇・二七米（九寸）で、八二・七噸（二万二千貫）もあり、三条金座の名護屋三昌によって完成されました。この銘文を作られた清韓長老は救世の悲願をこめられたのですが、崇伝らによって、その文中の国家安康・君臣豊楽などを、故意に曲解して読み取られ、徳川氏への呪いの文章であるとして豊臣氏討滅への口実に悪用されてしまったのです。

この鐘を撞いて余韻に耳をすましますと、豊臣・徳川二氏の興亡の歴史を聞く思いがします。

**大仏殿と大仏** 京の京の大仏さんは、天火で焼けてな、三十三間堂は焼けのオコった——と童唄にも歌われましたように、寛政十年の雷火で焼亡しました大仏殿も、妙法院宮真仁法親王（光格天皇々兄）のご尽力がありましたにもかかわらず、多難の時勢に妨げられて復興を見ず、ようやく天保十四年に木造上半身の大仏像をおまつりする堂宇が出来ましたに過ぎませんでした。しかし、昭和三十三年には改修工事も完成し、全く面目を一新しました。大仏殿の前に立ちますと左右の仁王像が上半身をのぞかせ類の無い珍しい大仏さまのお堂に、先ず興味を覚えます。そこで一步殿内に踏み入りますと、見上げるばかりの巨大な顔が、なごやかなまなざしでわれわれを見つめ、あたりに慈悲の光が漂っているような親しみを覚えるのです。

ここで、秀頼公造営当時の経費を調べてみましょう。金・銀・米で支払われたすべての費用を米で換算しますと、二、九六八、三七〇石二斗となり、現在の米価に従いますと、四九、七〇〇、六一九、三六〇円位になります。

石垣の巨石・大門・廻廊など秀吉公以来のものを除いた費用が、四九七億円を超えているのですから、当時の方広寺の壮麗なことは、到底筆舌のつくし得るところではありません。三七〇余年間、激しい変遷を経過しました大仏も、今や上半身を留めるに過ぎませんが、雄渾な彫法による仏顔の表現は、むしろ近代人の感覚に合致するものといえましょう。

## 京都大仏尊像の大きさ

御頂ヨリ御乳マデ	一四米二三糶（四丈七尺）	御鼻長サ	二米五七糶（八尺五寸）
御顔長サ	一〇米二九糶（三丈四尺）	御口長サ	二米六三糶（八尺七寸）
御耳長サ	四米五四糶（一丈五尺）	御肩中	一四米二三糶（四丈七尺）
御目長サ	二米一二糶（七尺）	御首廻リ	一七米八七糶（五丈九寸）